

A-MEC 株式会社



●提案型実験ショップの革新的サービス

- 代表者名 代表取締役 秋山 高広
- 設立年月日 2009年(平成21年)8月
- 所在地 〒400-0055 山梨県甲府市大津町979-5
- TEL 055-287-8642
- FAX 055-241-8631
- E-Mail a-mec.imura@sun.email.ne.jp
- URL http://a-mec.jp
- 業 種 技術サービス業
- 資本金額 300万円 ■ 従業員数 8人

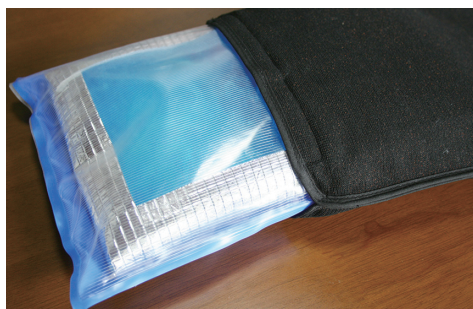
インタビュー

代表取締役
秋山 高広

テーマ

医療用を中心とした保冷剤応用商品の開発と事業化

「ローテク分野」で「特定された医療行為」でなく技術革新が進んでいない医療用人体保冷用の商品を複数開発し事業展開をはかる。製品としては新型保冷剤及びその応用商品開発の実績とノウハウを活用して、冷却目的に応じた最適保冷温度で機能性・利便性の高い商品を開発する。



保冷剤

新型保冷剤とその応用商品開発はすでに5年以上の実績がある。それは、東日本大震災後の原発事故の報に触れた時だ。電力不足になるだろうその暑い夏の状況を考えた時、即座に保冷剤の開発に着手していた。

これまでの関連商品開発・販売実績では、人体に優しく長時間保冷できる新開発保冷剤を用いた猛暑対策グッズがあり、「タウンクール」や「保冷ベスト」として、既に、累計で2700着以上の販売実績がある。今まで開発した保冷剤は、3～5種類の薬剤等を最適含有することにより特性を最適化させ、人体に最適な温度を長時間保持させるものだ。

新たに新型保冷剤とその商品開発実績とノウハウを踏まえて、医療用を中心とした保冷剤応用商品の開発と事業化を進める。医療用・治療用等においては、主に次のような保冷ニーズがある。

- ①熱中症への予防や緊急治療
- ②病気発熱者への使用：従来は水枕・氷枕等
- ③皮膚の熱性炎症（ヤケド、放射線治療の副作用等）：従来は標準的方法なし
- ④筋肉痛・骨折等への初期治療：従来は湿布、ア

イシング等

- ⑤その他（体温調節障害者等）への高温対応：従来は標準的方法なし

このように、予防や治療として体の各部を冷やす用途は多い。

ただ旧来からの氷嚢による方法や、市販品では湿布薬や気化熱方式など手間がかかるか、効果が薄いものが多い。

そこで…新開発の保冷剤では

- 最適温度：使用目的・治療目的に合った最適温度を持続する。
既存の湿布等では冷えが不足するか、逆に氷嚢や既存保冷剤では冷え過ぎる。
- 長時間保冷：開発品では設定した一定温度で長時間保冷効果が持続する。
既存品は早期に効果を失う。
- 結露の最小化：開発品は結露がきわめて少ない。
既存品は結露が多い。
また、医療現場では高度化した医療技術と患者の身になった手厚いケアが求められるが、看護師等の人手不足が顕著である。

そこで…

- 開発品は長時間冷却可能のため、看護師等による交換の手間が省ける。
- 医療サービス向上：手間がかからず、本来のケアに多くの時間を向けられる。
- 医学的な最適温度を実現しているため、治療効果が高く、患者満足にも貢献する。
- 使い捨てではなく、凍結して繰り返し使用できるため廃棄物が出ない。

など、新開発の保冷剤を使用し、多くのメリットを持つ応用製品を開発した。

実験は自らの体を使って体感しつつ成果を出していった



保冷剤サポーターを着用する

秋山社長は、そもそも製造業・建築業への経営管理、技術管理のコンサルタントである。事業を拡大していく中でA-MEC株式会社として法人化。A-MEC (Advantage-Manufacturing Engineering Consultants) とは、ものづくり優位を支援するコンサルタント集団という意味なのだという。また、第二事業部部として、提案型実験ショップ「りょうざい屋」を立ち上げた。これは実店舗を持たないネットショップであり、一般に知られていない便利機材の提案や、顧客が探し求める機能や製品を、時に探し、時に開発していくという実験的でユニークな事業展開をしている。

取扱品の中心となるものは保冷剤だ。猛暑対策として身に着け、例えば夏の野外で仕事をする場合などの助けとして人気を呼んでいる。

暑さ対策から、スポーツ後のクールダウン用に、

またけがや火傷などの炎症を冷やすため、さらに水枕として、用途は広い。冷たすぎず安定長時間使えるために必要なものとして、装着用のサポーターも開発している。

「全部自分で体験実験してますよ。薬剤を細かく調整しつつ、サポーターもそれぞれ着用して実験です。」

一般家屋のような社屋。その一室の実験室で保冷剤成分調整が行われ、装着用サポーターも作り出されている。その一角には犬のケージが置かれていた。犬用の保冷ベストも開発されていた。

「もちろん、犬も着用実験しますからね。何匹か知人のペットに協力してもらっています。」

にこにことサポーターを自ら装着しつつ説明する秋山社長。発想の根源は「人に（犬も！）優しく」ということなのだ気づいた。



実験室

目指すは2020年。大目標をかげつつ、きっとブドウも実をつける頃だ



グリーンカーテン

日本家屋である社屋。その軒先は爽やかな「緑のカーテン」がしつらえてあり、かわいいゴーヤの実が生っている。さらに、建物周りの塀にはブドウの木、枝がはっている。よく見るとそこにも実が、ブドウがなっている。

「スチューベンという種類です。いいでしょ。地球温暖化対策の緑のカーテン。どうせなら収穫があって楽しめるほうがいいでしょう。そして、山梨ならやはりブドウですよ。観光客のかたにも見て楽しんでもらえるでしょう。」

確かにブドウなら、紅葉まで愉しめそうだ。

甲府市温暖化対策地域協議会の会長も歴任する秋山社長の頭の中で、「vs 熱」というカテゴリーの中で、いろいろな思いや形がグルグルと音を立ててめぐっているのだろう。

計測器、背中に背負った保冷サポーター、犬の

ケージ、風にそよぐ緑のカーテン、ゴーヤの実、甘みのあるスチューベン。ひとつひとつを写真に撮りながら、実は小さく混乱していた。しかし改めて考えると、全ての出発点は同じところにあったのだと気づいた。環境に寄り添って、優しく過ごすためのひとつだったのだ。

「いまの目標は2020年です。売り上げを切りのいい数字までもっていくこと。オリンピックで海外から人もたくさんくるだろうし、山梨の多くの人が庭にブドウを植えて、緑対策の日陰をつくり山梨ならではのブドウをアピールして…」

事業としては大目標なのだろうが、見ても食べても佇んでも実感できる緑対策を本気の笑顔で語っていただくと、プロジェクト20分の2の成功は間違いないような気がする。優しく全部をサラッと語る秋山社長に、不可能はないような気がしてきた。



実ったスチューベン